

[ランチョンセミナー]

看護のあゆみ

—トレインドナース 大関和—

加藤 光寶

前獨協医科大学看護学部長

看護の仕事は、「看護人」である男性によってなされていた。女性看護師の発祥は、戊辰戦争の時である。戊辰戦争は、慶応4年1月3日から6日及んだ鳥羽伏見の戦いからはじまり、明治2年五稜郭の戦い終結までの内戦である。

下野新聞2007年4月3日の記事に「女性看護人国内初は壬生」、「銃創看護人として、此の地の婦人9人雇い入れ養生局へ差し置ける」とある。この「銃創看護人」「雇い入れ」「養生局に差し置く」と言う安塚の戦いでは、一時的であれ、看護を仕事とした女性が出現した事において女性看護人の初穂とみることができる。

安塚の戦いは、慶応4年4月22、23日の両日、宇都宮城に向かう官軍が、その途中の安塚で、旧幕府軍との戦いがあり、多くの負傷者・死者があり、戦いの翌日24日に養生局に看護人を雇い入れたという経緯が読みとれる。

ところで、戊辰戦争時の看護については、唯一の記録と言われる「日本陸軍病院記録」から看護の状況をうかがい知ることができる。この記録は、横浜軍陣病院が、神田泉橋の旧大名屋敷藤堂邸に移るまでの記録であり、「大病院日記」あるいは、治療に当たっていた英国人医師の名前から「シドルの日記」とも言われている。戊辰戦争当時の看護の状況は、この記録からうかがい知ることができる。壬生養生局での看護の状況も、これに近いものであったと思われる。「柔よく剛を制し」と試みに女性を看護人として採用している。戊辰戦争当時の壬生養生局での看護の状況も、これに近いものであったと思われる。

後に看病婦規則制定に尽力した順天堂病院の総婦長杉本兼は、当時の看護にあたった1人である。

亀山によれば、「看護師とは、系統的・組織的に看護教育訓練された看護師をさす」。この教育を受けたトレインドナースと言われている代表が、大関和である。大関は、黒羽藩家老大関弾右衛門増虎の娘である。安政5年に生まれ、桜井女学校（女子学院の前身）に看護学を学び、明治20年に始められた官立最初の医科大学第一医院看病法講習科でナイチンゲール学校を卒業した英国人アグネス・ベッチェの教育を受け、トレインドナースとなった。大関は、卒業と同時に医科大学第一医院外科の看病婦取り締まりに就任し、看護教育にも当たっていた。明治24年からは、新潟高田で看護法講習科での恩師瀬尾原始の知名堂病院で婦長となり、高田において看護教育を開始している。明治29年には、桜井女学校の恩師ミセスルーの看病を経て、看護法講習科同期生鈴木雅子の主宰する東京看護婦会で教育にあたり、派出看護婦会についても引き継いでいる。今日の在宅・訪問看護である。自らも、要請に応じて訪問看護を積極的に実践してきた。後に、自ら派出看護婦会を立ち上げ、看護師の養成と派出看護婦事業に専念する。傍ら、日清戦争頃から偽派出婦会や偽看病婦の出現による看護の質の低下を憂い、明治33年の東京府看病婦規則制定（布令第71号）にむけては、内務省に日参し膝詰め談判という意欲的な活動をした。これは、日本に於ける看病婦規則の最初である。

大関のたどった看護実践は、在宅看護、訪問看護、病院臨床看護、伝染病の看護、殺人によって残された家族のこころのケア、また、熱心なクリスチャンである大関のセツルメント活動として、日曜日

毎に、日清戦争後に増えた隅田川の水上市場者健康管理と多岐にわたり実績を残している。女性の出版活動には困難が伴った明治時代に、看護に関する執筆活動にもエネルギーを注いでいる。明治時代に発行された看護の本は鶴沢等によれば47冊ある。うち、大関は5冊の著者がある。代表的な著書は、明治32年発行の「看護婦派出心得」(叶鳳堂)、明治41年「実地看護法」(東京看護婦会)がある。実地看護法は、脳溢血後に那須で療養していた時に書かれたものである。

黒羽が輩出した近代看護の先駆者大関は、看護実践を生涯にわたって歩み、昭和7年5月22日に74才の生涯を閉じた。大関は、臨床看護、訪問看護、地域看護、助産、感染看護、看護教育と、その先鞭をつけ実践によって今日にも通用するの看護の形を描き、その業績から現代にある看護職に対しての道しるべを残している。